寛永諸家譜

藤原氏已四冊之内三

利仁流

104

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186(104)
函號 特 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山　西山

佐藤

寛永伝家系図伝

藤原氏

利仁流

遠山

加茂次郎景廉が子景朝遠山と号す

其子孫美濃国に住す

浅草文庫

巳三ノ家

某

左衛門尉　美濃国岩村城に住す

某

左近　美濃國苗木城ヲ領シ
病死シテ子なき少ク織田信長の
命ヲ志こゝろ親族ヨリ
友儔よりあとをけゞ坂城ヨリ領シ

友儔

右兼ツ依　法名嘉雲

ヒとりを美濃ヨリ飯島城ヲ領シ
ツ依ヲ乃命ヨリ居ヲ苗木
城ヨリ領シ飯島城ヲは嫡子友忠
ヨリ領シ

友忠

久兵衛尉
飯島城ヨリ領シ嫡子友信ヨリ坂城ヲ
ゆづり友忠ヲ同ヲ河手羅城ヨリ領シ

友信

右衆に伝
飯塚城を信長逆心よりて伝長
乃ことを誅せらる友重が庶兄なるを

友重

次郎兵衛尉　母を伝長姪女
甲列軍勢所の手羅城とせりしを
十九歳にして討死

友政

三郎兵衛尉　坂久兵衛と号して　母を
同前
信長より信列本曽城をさへのこり
父友忠をもびし友重と又ゐ三人を
ちくこの手羅城に居せしむ長
甲列の軍勢所の手羅城とせむとへ
こゝもかくこの城をとりかこみて
ゐかし此こゝを友重討死を契友勝

を苗木城にをひく病死のゝちゆく
に伝ふるを祖父の居城苗木を
給ふ父友忠ことゝに山城に移
住す
天正十一年秀吉より森武蔵守
長一が麾下に属すべきの旨あるとと
いへども友忠政ちこゝばゝらゆへ
長一が家人幸田とゝものを武将
こして苗木城へよせ来るのよ

友忠友政半年を経てかむひ幸田が士
卒をもつて討捕幸田はもとより
ち故ありしゆへに長一みゝげかゝ
軍勢をひきいゝ苗木城をとりこむ
こいへども父子城を守護す
よりて孫小八長一引きもゝそのほ
和睦ありて城を長一ゆるこし
まれいらを別演松よりこと
東照大権現に改服を友忠を賞沢

小大膳亮屬せられ其家よりして
病死及改易を演松寺騒列よりて
まで仕へ奉りし
同十八年相列小田原落城の時
大檀現の鉤命亦亦寺を拂京式部大輔
よ屬し上列鈴林亦任
芸州安芸上板京繪叛逆乃刑
大檀現下野小山小田を發あり武
こき石田治部少輔三成と又叛て石河

彼芸州信列本多筋九代度豊臣関
治兵衛と濃列苗木城に住て田也
中務と同郡岩村の城に住をのく
又三成亦屬せんとせられよりて
大檀現小山よりしく改易とりおされ
法列又本多筋の地理をつゞませ
法よ改易地乃をもむきくハしを
云と一まれらは秘抱なるべよ
玉くりをもびて黄金百枚を給ひ

本芳筋又苗本黒村の西城小をと
むこと親族こゝ所ゝ山村書兼
子村平右衛門つゝ場末右衛門と小笠原
勘兵衛等と同志し仏乃逆徒と返
はゝ濃州よりて中津川駅場
等を敗北し面本陣を和睦して
うけとる始末士と黒村の城よと
よせし変て治部少輔殿の雲え
あるにより田丸中務殿家人福谷

三ゝ亟をして和を結しむる変よ
所ゝ東海道乃諸士遠山民部
少輔利京をせくゝして黒村乃
城とせんたゝとしに
台徳院殿信州表国より流刑寄来よ
いくこゝと正ゝ中やう小御を殺あり時
本曽筋の諸民ゝ遠山より源山より
れけゝと支改仏ゝ剣札とゝて
投民どもとゝ札回書ゝかゝしむ

代官き八末大臣御馬代鞍等
料と称じ同ゑ大井手いこつて
御馬一疋と称にされいらその御
百石駕しゆひ拾列大坂よ
着御ありそのゝち支改このゝじ
軍忠とはゞまきその旨
大権現御感の作とゆゝ本紙ら
よりまして苗末城なゝび手領地
壱万ゑ百石余と称賜ら

元和ゑ年十二月苗末よとしゝ孔を
六十四歳　法名傳公

秀文

刑部少輔
芝丘十八年ゑ六歳ゑゝ
台徳院殿ら謁しゝまりら
元和六年ゑ月十二歳にゝゝ元文ら
芝跡苗末城を治ら

交貞（こもさだ）

久太夫

家紋（いえのもん）　丸円の字ばあるこめるく

丸の円よ二引（まるびき）

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

加茂次京廉ゲ後亂なり

京成

生國英濃　法名大岳

濃列的知と領

京行

相模守　生國同前　領地となれるが
織田信長をつかふ
元亀三年十二月朱八自流列と持て
をしく討死嚴六十四　法名京叔

京玄

六郎左衛門尉　生國同前

利京

勘右衛門尉　按民部少輔と号て
生國同前　領地となれるし
天正十年信長甲列より發向のとき
利京をうばひて松子一行
東照大權現の麾下に屬し奇
特あり滅亡のち河原左兵衛尉その
かゝ英信組此牧軍なるべし利京
一行ハ甲列の城をまもれ

同年六月明智日向守光秀信長を
弑たてまつるく軍列を書乃
軍令をふるかへ海利京又ゑを
又駿列よりむんとをくくて
江篠よきこうこゝ海ゑ中ゑ
低右清つ府小ゆさあひ自今こ
後ゑ列をう
大檀現よりをくくゑ列べきの合
と約諾し濃列よりぬこのと

き森武蔵守を一書に秀吉よ屬し
信列金山の城と海りりのゆくよ
英濃組北信士ハ秀吉の命にをこ
ゆひくを一ゑ屬し各人質を
いくをて利京やむことを海ぐをて
一行が姫とを列く質とし金山
北城ゑつひ数月をを新豊後
乃秘よををびくいをとうくし
元をゑ中領明初を角ち

参列是助よりこと
大檜現りつくまりの爲きも
上國より連まる新とゝ
出許容ゆ是一こゝろすと空はる
りゝ急く人質一行が姫と生宮
戸と利京が有ひらら整京村乃
河急りさまて
大檜現この事と空会及ぶれ懸懸
のは詞とくはへさせ申ふ

同十二年長久年合戦のとき森長一が
家人石黒茂兵衛関右ゆふり濃列
的知北城と称りしむ北利京
大檜現の名と叫ゆりとゝやうもせ
むしに月十七日時刻と移ばかの
城とせあたり首十五級ときつとこ
是ばら三級とゆりく尾列小牧
北塚りとくは西尾小右衛門女
泳八郎とりて　上境小伯ふこ

為ニ再三 叡感ニ被
地を利家ニ給はるそのち
天下秀吉ニ屈しとられ時勢
ハ森右ヱ大夫より
同十八年相州小田原陣の時利家
大樹現の麾下ニ屈し事ニ陣
をつとむ
同年上杉のうち中郡村を領
賞ニ与ふ年上杉京勝と伝代の時

大樹現ニ屈しまいらせ郡列
小山ニいたりぬと紀石田治部少輔
三成上方よりひく謀叛をなす
ゆへ田丸中務三成小屈し清洲
岩村の城ニ楯籠同年古渡時分
の為城たかしゆへ
大樹現利家と　叡慮より　仰よ
いよ〳〵時智を汝累代の本領ニ
玉人ゆへ屈をもって汝ニ屈

ろべしとみやうにけせのぶ足段の
塚とぬくなしとなりてすて
をしく利京小山ちと戎列よりう
塙男方京とたのひ異しいうぎ
ちせゆきの月二万九曉明知の城を
かこむ城中より猶籠こゝ塙乃山川
左ら勅京古依守出ぶぐく伝戦こと
ごとたのひさゆうすあとぶとして
けぬて數小ちて利京こゝをとを

て首さ二級とぬきちと時
大檀堤三成と清征伐のこちとでに
ぬを發あるを利京ゑ北ゆこゝろ
の首ぬら二級と尾列勢西よとう
と境て伯へくまちこゝ塙て
はかりぐぬ感たのちくいよく出ゑ
とけくし本男英法級ふとちう
こゝとあを世器村の城をせむべき
乃むかりぐけちを 嚴金をの

勢志ゟ出こゝろよ九月十四日関原の
ハ合戦ヲ歌軍雌雄を明ゟ出よ
田丸岩村の城よこゝ為すあるこゝ
して勢列清ゟ出ふもむくなる
ゟ利ゝ利京岩村の城を出ゟ
同年の冬　信よ
と問答ゟ前ゟ岩村の城
の城ハ京これとまりと整之
乃ゟ松平和泉守ふあひゟゟ

中頃的知ハ右乃勲功ヲまゟく
利京毎年ゟ
その〻ち城列体ゟをゟく送信下
ヲ数せゟれ民部少輔ヲ但ゟ
同十九年四月廿日辛ゟ歳七十ゟ
法名自体

一行

子助　生国同前

寄ハ六良左衛門尉京玄ゞ子なる京玄
犯くのち利京これとやしまいく
子とて
天正十二年長久手合戦の時信列
真田を押んが為ち草田源すれとし
くに小窓乃城を固ちらしむ
一行也又同主蔵也
同十六年の冬
大檜現れ石よ意じて一行殿列
方京
たとむくと紀甲州殿河の境平沢峠
下をひくく大宮にあふくる
動九郎　のち動右衛門と号す
生涯同苦　領地上州たる
寛永十九年大坂出陣の記天王寺
はた本陣ハ右衛のうちなる
元和元年大坂表陣のときハ河列
牧方ハ押ハ形

寛永十五年六月廿日死去六十四

法名玄栄

経家

道脇

紀伊大納言頼宣卿よつふ

保家

勘三郎

元和五年五月廿四日死去年十七

長家

法名宗彩

後家号右衛門と号去

生国同前　行地とおなじ

元和五年

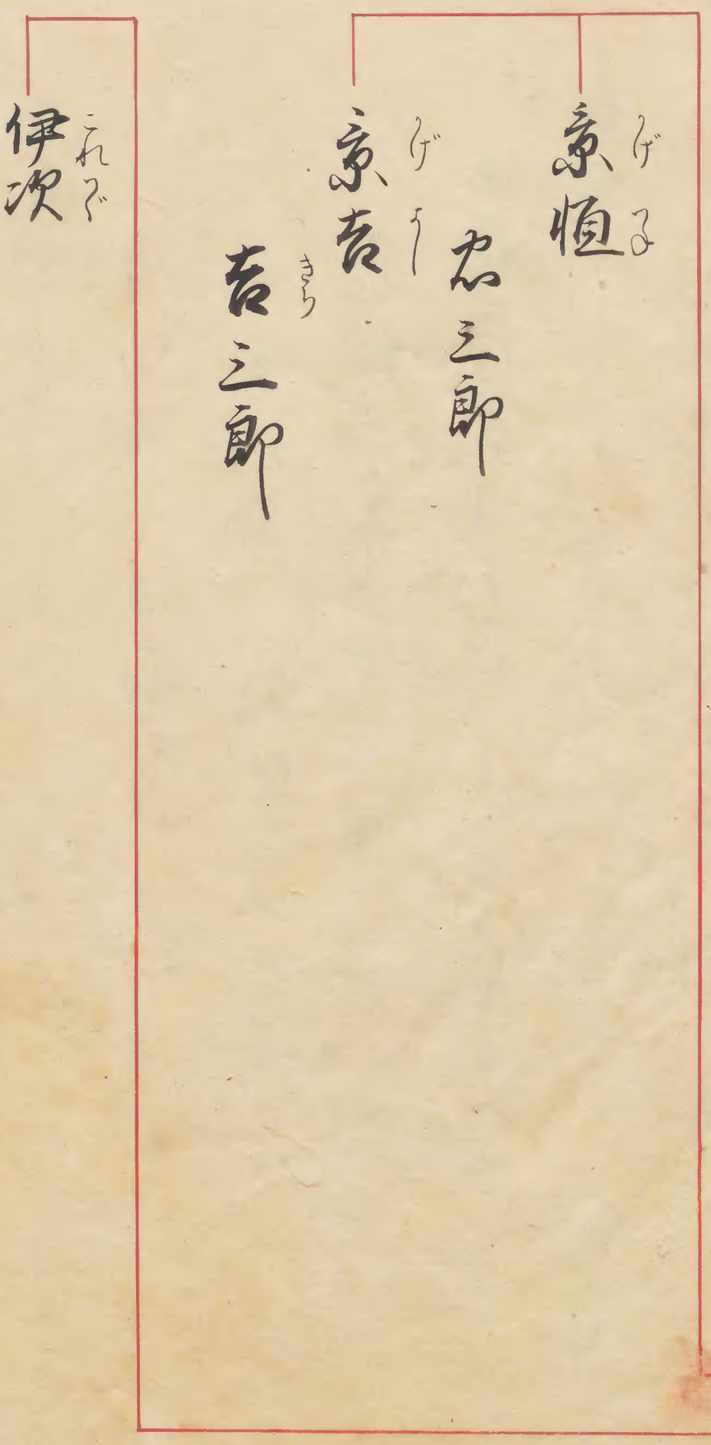
台徳院殿より渇しきまつる

京重

忠三郎　のち十右衛門と号ス

寛永元年

将軍家より賜しこまもの



寛永九年
将軍家より賜しこまもの

家紋　丸円九字　あるいハ丸の内二引

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

某

紀伊守　中國美濃
太田康資入道氏亡没落乃時
とうじく江戸の城主なり

京次

三郎右衛門　生國武蔵

天正十八年小田原没落の時江戸より

居住致す

東照大権現関東に入国の時取立て

大工番をいたすものなり

台徳院殿よりつくりまゐり

元和八年九月より死去七十二歳

正次

平右衛門　生國同所

台徳院殿よりいまに大工番を

いたす

寛永十三年閏月より死去六十五歳

京重

忠兵衛　生國同所

法名　清感

慶長十二年
右徳院殿より御くまつりのち
将軍家へつかふまつり大ゐ書城
ゐたゝむ
寛永四年より大坂ゐ義参行と
ゐたゝむ

京則
平三郎　生国同前

寛永四年
将軍家より御くまつり大ゐ書
とゐたゝむ

為庸
新八郎　生国同前
寛永三年七月
将軍家より御くまつり大ゐ
書とつゝむ

家紋

九字（くじ）

二引（ふたひきびき）

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

●東

丹波守　武列　江戸の城小屋

直次

右京亮　本國　美濃

越後　よりつもり　京虎よりそこび

時丹波守こ号して之ほ京虎が伯母を
娶小條三郎京虎が長子なり孔
ときき亟次郎老とかなり
天正六年三月十七日三郎と京虎と
合戦して三郎亟次より謂くいく
歌軍今ワガ後とさへぎりを退
方とうしなひぬるとも我ワるるば
はしてし戦死もべし亟次も城中ア
ワガ書ある歌の手うしい

海津城から亟次ふれを聞く
もかはち城より三郎が家室
ゆびよ長女人を殺し城中に
たとはかりて自害す　法名浄連

亟吉

彩次郎　母宮良無清と
生国お模
小條氏亟よ法名

天正十八年小田原もてに没落して
氏直高野山へのぼり出家をまねき
さてひゆうんをまつりをと
しく
東照大権現かさげまくを麾下へ
渇しまつるべきのよし
台命をうけたまわりといへども
僧代ゑりよりたるとく高野へまゐ
ぶ屋きの望をと云こまゐてび

当命にのぼりく氏直を投山りとをと
もゝやうに泊りくはくへくまゐる
屋し書みをば心りに泊うせく
いぶくにをとくゐしとのれ宣ゑり
直吉　作をとうけ泊りに書みを
相模国中郡白根郷よりをきその
とりむさ城云こをに時ゑしげけ
ゑくを御寄申をとゐりに旦本多
泳八郎正純が添状にて

天正十九年
大樓沢と申候領地をとられ
文禄元年釣鮮陣のとき肥前国
名護屋にようこびまいりたる
台徳院殿と申しまいらせ
慶長五年関原出陣の供奉をいたし
こうむ
同十六年十月廿七日に死す四十九歳
法名 宗吟

京繩

新次郎　坂部長清殿二男
生国同前
慶長八年
台徳院殿よりめしまいらせ
大坂安度の出陣に供奉
元和九年
御軍家に仕へまいらせ

京憲

平三郎　母八良右衛尉之娘

生國武蔵

寛永八年ばくふ

将軍家ゟ被召出

同十三年より法くゝ寺ゟ

家紋　丸字

遠山

利仁十代遠山京胡が後裔

直京

丹波守　生國武蔵

永禄六年五月廿日にして討死

法名大農宗岑

寺号吉祥

秀重

河村兵部大輔

河村孫次郎が家より入て新おこなう

元和四年七月十日死

関家正鐵　　法名

直定

はじめは河村作兵衛と称し後

壱山六右衛門尉こと河村孫次郎の

氏子養

小源氏壱より壱

天正十二年四月十一日氏壱より壱

の字をさづけ壱定と称す

同十九年六月十日

東照大権現より拝謁す

文禄元年豹韓陣のとき肥前国

名護屋よりこゝにまいる

慶長六年奥列陣此ところ小山より
信濃へ
同年
台徳院殿とおしくまりまして
信州真田陣小信濃
慶長十九年大坂出陣此ところ城列
依其此御旅書とはとむ相之
此出陣ハ色又のごとく此時
作あつまりく立書此ものハ十人
御供しくまりの亜宝色又
負不つなり
直清
寄一　後理兵衛このくこむ
生国武蔵
文禄三年
大権現より御名之くまり
関原なりびに大坂為度の御
陣小信濃のち

台徳院殿より法名をうけまつる

寛永十年丁酉卯月十七歳

助直

孫一郎　生國後河

寛永三年後河大納言忠長卿

つゝしみ

同十一年

将軍家小姓組番頭をつとめ

直政

半助

直信

求助

家紋　二引九字

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

安吉

新八郎　本國英濃の
廣忠卿より
ときき林肥之郎と御ものを賜
高野山のぐを大徳院より礼
をおくむけ位牌の書よ林肥之

壹山彩八郎 為人の名と為る事

東照大権現より下され給ひし
隼人正と称ふ
文禄二年九月朔日六十七歳にて
死す

安政
平大史　生国三河

大権現より仕へ奉り
慶長五年三月廿日江戸にて
死す　五十四歳

安則
久四郎　生国三河
大権現より仕へ奉り

安次
久四郎　生国武蔵

白川院殿
為軍家よつくしまつる

安忠
久四郎

安重
平大夫　壱列濱雲より
文安六年六月十八日

白川院殿よつくしまつる

家紋　丸内二引

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

京家

右馬允　生国武蔵　法名宗也

小條氏政同氏也之法

京政

小右衛門　生国同前

天正十八年
秉照大権現ゟ仕へこゝろくまつり
冥加なゝびよ大坂出陣の後
とつゝむ
元和七年ゟ死去四十八歳

京次
小右衛門　生国同前
慶長十一年

台徳院殿ゟ仕へこゝろくまゐる
同十九年大坂出陣のゝき供奉
御城番仕ゝとつゝむ
寛永元年
将軍家ゟ仕へこゝろくまゐる
同十一年四十三歳ゟ死去

京直
右衛門　生国同前

寛永十三年

将軍家小袖くまれる

家紋　丸内二引

国立公文書館
National Archives of Japan

遠山

利仁

鎮守府将軍

叙用

従宮寮以

国立公文書館
National Archives of Japan

吉信

加賀守　泛之位下

重光

奥正

若狭守

澄口

正重

左兵衛尉　従之位下

京道

加賀介

京清

加茂之

京廉

加茂次

京朝

壱山の元祖　左兵衛

山間中絶

直京

丹波守

小條氏康より代々家老となり

永禄七年正月七日星見義高ニ国府

乃臺ヲ攻し戦死ス

女子

右田彩六郎康資ノ妻

宣政

右田新六郎

女子

英勝院

資為

壹山因幡守

元和九年八月八日ほゞろく

将軍家より拝領して

寛永七年十二月朱印状を以下より叡慮

実ハ吉田氏こゝろいへを伯母なるゝび

ゝ重政が母みかを山氏こゝをかゝゞ

少へゝ吉田をとゝゝこゝを山と称を

これ英儒院の意によりてなり

家紋　九字　二引両

西山

昌永

彩四郎　生国甲斐

武田信虎をすび信玄ふつふ

天正元年より死て

法名苦欲

昌次

八兵衛　生国同前

信玄より義信に属す

永禄四年信州川中島よりとしく

京虎と信玄とより義信と射陣

のとき昌次鉄炮を所望戦功

をとげまし疵をかうむる義信逝去

のはかりこび信玄より勝頼へ

仕へ鉄炮をたづさへ来れり

天正十年織田氏失しくのち

東照大権現甲州に入給ひ此ごろ

かさね鉄炮をたづさへ

ゆるされ

同十二年尾州小牧陣の時昌次病

ふかく臥せ伝年をかさねる所こはい

嫡子昌寛伝年しに長久手にて

戦死

大檜現関東に入国乃時武列言葉那
根岸村小とひしく采地と為す
昌次壮年より疱瘡を煩ひ
て行学れ不能
台命受け
多分とく城西乃丸留守乃
城番をいたす
法名京正　七十七歳にて死

昌寛

昌勝

源七郎
長久年戦場よりしく討死

八条湯　生国同前
大檜現
台徳院殿よりたくさんなり
元和三年
将軍家にたくさんまいり
小十人の組頭となる

寛永二年に膳を行ひ
同六年 食邑をくわへ
同十七年七月十四日 五十九歳にて
死せり 法名 泉

昌親

八兵衛 生母同前
昌勝が養子となり 実は兄
昌義がゆゑなり

初軍家よりくわへ
寛永十七年十一月 飯地をくわへ
昌勝が遺領をつぐ

寛次

新四郎
大檜沢に住せり

寛宗

太右衛門 生母甲斐
元和九年

将軍家より被召出
同年 江戸上洛 仕 御切米を
賜ふ
寛永三年 江戸入洛 仕 御供
同六年九月小十人の組に成
同年十月 食禄をくはへ給ふ
同十一年 江戸入洛 仕 御供をつとむ

昌春
又郎三郎

寛明
次郎八郎 生母武義

昌近
千助 生母同前

栄
吉三郎 生母同前

栄
源助 生母同前

女子

家紋 丸曜（まるよう） 副紋（そえもん） 鳥酸草（たびらこ）

国立公文書館
National Archives of Japan

西山

本を領郡と称して武田信玄の命
によりて領郡とあらためられ西山と
号して昌義甲州西山の方を領つ
かさどりなり

昌義

宗右衛門　生国甲斐

武田信虎より　四十一歳にて死す
法名乗喜

昌俊

十右衛門　生国同前
信玄をもび猶頼より相見ル使
書をとらしむ
天正十年ゟ召れ
東照大権現ゟ仕へ召れ

同十二年尾列小牧長久手ゟ使者を
仕らしむ凱旋の時　上使にて越中
の国を作〻問義助がもとにたもむく
ゟ所法方へのれつをとり海ゟ
変出十九年七十七歳ゟ死ス
法名永林

昌俊

十右衛門　生国同前

大樓現
右徳院殿
将軍家よりつくさせ給
寛永三年六十歳にて死
法名宗永

昌信
清兵衛　生母同前
右徳院殿

将軍家より清くさせ給
寛永二年三十九歳にて死
法名源丟

昌久
清兵衛　生母武蔵
寛永十七年
将軍家より清くさせ給

昌繩

右郎兵衛　生國甲斐

あるとき

大権現様御東国小田原奥州

関原為北陣御陣

慶長十四年　鈞命をかうむる数度

かの右輝を御ゆるしなされ

元和元年松平忠輝様御供仕り罷下

大坂出陣のぞむ時天王寺

をしく味方敗北といへども昌繩を

手傷をおうてそうだ明陣の時右輝

をもって敵軍の兵穿鑿を昌繩と

ちからをあわせ御授とたのもうされて

台徳院殿

拾軍家より御ゆるしなされ

昌門

右兵衛

昌姓

久右衛門　生国武蔵

寛永十六年ゟ召れ

将軍家ゟ下くさくまり

家紋　九曜　副紋鳴鼓草

後藤

寶元

彰元　生國を以
世に秀吉のいとこにあたるべし
是列侯よりもむくそれより
東照大權現より使くゝ命り被

正勝

又十郎　久平二号ス　生母同前

崇源院殿出嫁礼のとき供奉せしむ

その後

大権現よりくくまりを免ぜらる

乃御書をたまはるもの

享年十一歳七十八歳にして病死

正成

与右衛門　生母同前

大権現よりくくまりあり

正冬

弥右衛門　生母武蔵

右衛門殿殿よりくくまる

正次

六右衛門　生母同上

文長十一年
台徳院殿より召出る
元和五年
将軍家より清水召つる

正俊（まさとし）
清水郎　生国武蔵
寛永十三年
将軍家より相渇（あい）し同十六年より召つる

召出る

家紋　丸の内枝柏（うちえだかしわ）

国立公文書館
National Archives of Japan

坂巻

吉久

甚兵衛　生国相模

右徳院殿

初軍家よりくゝ通り被

江戸にてひくゝみ十二歳にて

病死

久次（ひさつぐ）

甚兵衛　生国武蔵

家紋　上総（あがうさ）の丸（まる）

国立公文書館
National Archives of Japan

後藤

本は源姓鴻津氏なるは始めたり始め後氏とるは出でまし下よくりまこの事を考へ

●玄德

傳称鴻津患幸が子也良法名日彰が弟なりはじめは家つぎ

享禄年中十九歳にて養列を
お受けられしより関東をもむき養列
をいたすと今切の渡をにをいて
私換し書簡をほうぜんとて
小して後河へいる時今川氏
氏親より出仕懇ゞ先祖敵名たるす
と申ゝ長浦とまねくゆゑ
還俗して氏親より厚き扶相列
小田原へいたさつと小原大夫

氏綱より厚き時牧攻乃軍功あり
ゆへ氏義相模の国をもらく
食邑をあたふ

慶辯

武列淺草梅園院
天文元年後河へくむまり
慶長十四年又月十六日七十八歳にて
死去

永久

鴻津右衛門尉

小田原小隙家より江戸壹山丹波守

むすめと永久元水が書状な

ましたる江戸より使を

出尾と小隙と出郷より

合戦ありて死せ

葉

鴻津左大史

壹山より家ー江戸小使を

小田原滅亡の時後河へ

如ハ壹山丹波守が女

鴻津左衛門

小隙家より壹山へ家ー

江戸より使を小田原滅亡のち

後河へ死せ　法名左半

死て　法名乃奥

菜

鴻津左衛門尉

天文四年相列小田原より出る

小條氏政ゝ

天正十七年氏政先秀吉の兵とおれ列

より發する事を受て籠城れ用意こ

してを急ゝ要害と、まへ左衛門

ゝおかせ〻く根府川山の石垣と

ゝ左衛門尉の要害

菅沼左衛門と云氏政先

ときゝ大よいうを左衛門と自殺せ

むゝ時左衛門十四歳なる　法名

宗玄

菜

鴻津隼人　生國同前

小條氏亡よつて小田原滅亡の後

武列江戸よりをしく死て

忠正

母は源左衛門
又家の妹が娘子と
生国同前
なり是より為津氏とあらそうて
代々後藤氏となる母の系譜く
はしかるべく
慶長十九年十月廿六日ゑ十八歳にて
死す　法名玄賢

某

女子

蓮義坊　共言家　お列と云

忠直

長八郎
天正十二年豊列濱松に生る
十二歳より
名護屋殿殿下つゝくへ
下列に是小姓

慶長五年黒田摂津守様御近侍とはかられ候事を感じ
たがしめをにしまもと列衆に
もしく領地をたまふ
寛永八年二十歳ふく孔を　法名
光心

吉勝

市右衛門
文禄二年武列器より出る
寛長十年太閤殿ゲ巡礼をつき領地
をたまふり大坂夏の陣より修業仕
寛永十年
将軍家より上総の国大多喜領今賀
村源兵衛村をもしく采地をくゝ
給ふ四領ふ新く五百石を領
知す

男子四人
女子六人

久利

寛永九年武州江戸より生る

十歳小〻

将軍家より拝領しつる書付

家紋　五圓の内白十文字　酒津が家の紋なり

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan